

Title	Self-Focusと「他者」：日本人の自他関係の枠組みから
Author(s)	上田, 恵津子
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1996, 22, p. 385-397
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4097">https://doi.org/10.18910/4097</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## Self-Focusと「他者」

——日本人の自他関係の枠組みから——

上田 恵津子

### 目次

- I. はじめに
- II. 日本人における「自己」と「他者」
- III. 一般的な他者とSelf-Focus
- IV. 特定の具体的な他者とSelf-Focus
- V. おわりに

## Self-Focusと「他者」

——日本人の自他関係の枠組みから——

上田 恵津子

### I. はじめに

注意が自己に向けられ自己を意識することをself-focusという。Duval & Wicklund (1972)、Fenigstein, Scheier, & Buss (1975)、Buss (1980) らによって提唱されたself-focusに関する一連の研究は、自己に注意を向けることと社会行動との関連を明らかにしようとするものであった。特に近年では、自己は私的自己 (private self) と公的自己 (public self) に二分して考えられるようになっている。私的自己とは、自己の感情や気分、動機、自己評価など、他者からは直接観察されない自己の内的側面であり、公的自己とは、自己の外観や他者に対する言動など、他者から観察されうる自己の外的側面である。私的自己に注意が向けられた場合 (私的self-focus) と公的自己に注意が向けられた場合 (公的self-focus) とでは、salientになる行動の基準 (standard) が異なる。前者の場合は、自己の個人的な価値観や規範に従って自律的であろうとする行動が生じやすく、後者の場合は、社会的規範に従って社会的に受容されようとする自己呈示的な行動や同調行動が生じやすくなる、とされる (Scheier & Carver, 1983)。このような私的自己への意識と公的自己への意識のあり方は、対人関係や対人行動を様々な形で規定することが示されてきた。

私的自己であろうと公的自己であろうと、注意が向けられるのはあくまで自己なのであるが、他者と対置した所に自己が存在し、自己と他者との相互作用が行われると考えるならば、self-focusは他者の存在を抜きにしては考えられない。特に公的self-focusは、「他者の視点から見た自己の意識」(辻, 1989) であって、対人行動に多大な影響力をもつということからわかるように、他者の存在が重要な意味をもっている。また、私的self-focusは自律的行動を生むとされるが、自律的であるというイメージを他者に与えるよう印象を操作することがあり (Schlenker & Weigold, 1990)、やはり他者の存在を意識することの影響を受ける。

ところが、その場合の「他者」とは誰なのか、あるいは誰でもよいのか、という問題は、これまでほとんど無視されてきたと言ってもよい。辻 (1990) が指摘するように、従来の研究で

取り上げられてきたのは、専ら「匿名のあるいは一般的な他者」の視点から見た場合の公的self-focusである。例えば、これまで行われた実験で、公的self-focusを高めるための操作として用いられた観察者というのは、大抵実験者か実験者の助手であり、被験者とは特別の関わりをもたない匿名の他者であった。また、ビデオやテープレコーダーで被験者自身の姿や声のフィードバックを与えるという操作を用いる場合でも、その際に意識される他者は特定されないで、やはり一般的なあるいは匿名の他者の視点から自己を見ることになる（中には特定の具体的な他者の視点から自己を見た被験者もいたかもしれないが、大抵は不特定多数の他者の視点に誘導されたと思われる）。このような実験操作だけでなく、自己に注意を向けやすい性格特性を測定する自己意識尺度の中の公的自己意識項目の内容をみても、他者が誰であるかを特定するような記述はなく、一般的な他者を想定している。

しかし、一般的な他者から見られる場合と、特定の具体的な他者から見られる場合とでは、喚起される公的self-focusの質や程度が異なる可能性がある。従って、この両者を区別して考える必要がある。

さらに、従来の研究では、アメリカで発表された理論や研究成果を起点としていたために、アメリカ人の自他関係をもとに論じられてきた感が強い。しかし、日本人と欧米人とは自己の構造や自他関係が異なることは数多くの研究で指摘されている。一般的な他者であろうと特定の具体的な他者であろうと、自己と他者との相互作用を問題にするのであれば、日本文化の枠組みから「自己」と「他者」という概念を捉えて論じることが必要であると思われる。

そこで、本稿では、self-focusを生起させる「他者」の意味を、(1)日本人の「自己」と「他者」という視点から、(2)「一般的な他者」と「特定の具体的な他者」とに分けて、考察し、それらの他者によって喚起されるself-focusを、「他者の存在→self-focus→対人行動」という図式で捉えることを試みる。

## Ⅱ. 日本人における「自己」と「他者」

### 1. 日本人の自己

日本人の自己のあり方の特徴について、以下のような指摘がなされている。

例えば、土居(1971)は「甘え」、濱口(1977)は「間人主義」、南(1983)は「自我不確実感」という概念を用いて、それぞれの日本人論を展開している。これらの日本人論に共通して認められる日本人の自己のあり方の特徴は、自分と他者との区別があいまいで独立した主体としての「個」の意識が弱く、自己認識の内容や構造が周囲の他者によって強く規定されるということである(高田, 1992)。

木村(1972)は、日本人にあっては、自己は自己自身の存立の根拠を自己自身の内部に持っていないという。西洋人の自己がその存立の根拠に関して、垂直に神とのみ繋がっているのに対して、日本人の自己は水平的に人と人との間に根拠を持ち、従って、他人がいあわさなけ

れば自己は自己となりえない。自分が誰であるのか、相手が誰であるのかは、自分と相手との間の人間関係の側から決定されてくる。個人が個人としてアイデンティファイされる前に、まず人間関係がある。人と人との間ということがある。自分が現在の自分であるということは、決して自分自身の「内部」において決定されることではなく、常に自分自身の「外部」において、つまり人と人、自分と相手の「間」において決定される。そして、自分が何であるか、誰であるかだけでなく、自分がいかにあるべきかもまた、この人と人との間からの規定を蒙っている、とする。

鱧(1994)は、自我のアモルファス構造を考えた。アモルファス構造を支える表層部分は、対人関係的場の力動性に敏感な部分で、自我皮膚(Ego-skin)とよばれる。日本の場合、場からの圧力、場による支配が比較的強いので、他の文化の場合より、この自我皮膚が肥大している。他方内的には、構造化されるというよりコロイド化されており、多様な価値を重層的に取り入れることを可能にしている。

また、Markus&Kitayama(1991)は、欧米人と日本人の自己のあり方の相違を、相互独立的自己観(independent construal of self)と相互協調的自己観(interdependent construal of self)という区分を用いて説明する。欧米では、自己は他者から分離・独立しており、他者との関係や状況に関係なく自律的で独自のである。他方、日本をはじめとする東洋では、自己は様々な他者と結合しており、自己の境界が不明瞭である。他者との関係・和・義理・自分をわきまえることが重視され、自己認識は他者との関係や状況に依存している。そしてこのような自己のあり方が、認知・感情・動機づけに様々な影響を与えているという。

日本人においては、このように自他が分離しない関係志向的な自己観が優勢であるために、他律的で(荒木, 1973)、他者の眼を気にするという行動様式がとられるのであろう。

## 2. 日本人の人間関係

日本人の人間関係は、内と外という言葉で区別され、3つのカテゴリーで構成されるという考え方が以下の研究に共通して認められる。

土居(1971)によると、日本人が内と外という言葉で人間関係の種類を区別する際の目安となるのは遠慮の有無であり、これによって人間関係は3つの同心円で構成されるという。最も内側には遠慮がない身内の世界、中間には遠慮が多少とも働く義理の関係や知人の世界、その外側には遠慮を働かす必要のない無縁の他人の世界が位置する。一番内側の世界と一番外側の世界は、遠慮がないという点では同じであるが、前者では甘えていて隔てがないために無遠慮であるのに対して、後者では、隔てはあるがそれを意識する必要がないので無遠慮なのだということである。このように内と外を区別し、内か外かで行動の規範が異なり、他者に対する態度や行動を変えることを、日本人の大半は当然のことと考えている。ただし、内と外という場合、3つの同心円の一番内側を内、中間帯を外とみなすこともあれば、一番内側と中間帯を合わせて内、一番外側を外とみなすこともある。「外づらは良いが内づらは悪い」とか「内弁慶」

という場合の内・外は、多くは前者であろうし、「旅の恥はかき捨て」という場合は後者であろう。このように、内と外といっても、遠慮が多少とも働く中間帯を内と考えるかあるいは外と考えるかによって、内容が異なってくることになる。

また、井上（1977）は次のように考察している。ウチの集団とソトの集団との関係は、同心円的に重層化した構造をなしている。ウチに対してソトであった集団が、さらにソトの集団に対してはウチの集団となる。このような構造の論理的帰結として、これ以下はウチとしか言いえないような小さな集団の単位と、これ以上はソトとしか言いえないような大きな集団の単位が残ることになる。前者の観念の総称（一番内側の世界）が「ミウチ」あるいは「ナカマウチ」であり、後者の観念の総称（一番外側の、いわば無縁の存在ともいうべき世界）が「タニン」あるいは「ヨソのヒト」である。そして、その中間帯の世界が「セケン」であり、これはさらに「せまいセケン」と「ひろいセケン」の二層から成る。このセケンとは、土居（1971）が「遠慮が働く義理の関係」と呼んだものに相当する。つまり、個人にとってミウチやナカマウチほど近くなく、タニンやヨソのヒトほど遠くなく、その中間帯にあって、私たちの行動のよりどころとなる準拠集団である。我々は、ミウチの間では「ミウチの恥にふた」をすることができ、タニンの前では「旅の恥はかき捨て」でもよいのであって、ともに体面をとりつくりよう必要はないが、その中間帯の世界においては体面が問題となるのだという。

中根（1972）は、場の共有性という視点から内と外との区別を論じているが、やはり人間関係は3つの同心円から成る、という。最も内側には、第一カテゴリー（ウチ）とよばれる自己にとって第一義的な所属集団がある。この第一カテゴリーを構成する人々は、自己にとって最も重要な意味をもつ仕事を通して形成される仲間であり、ほとんど毎日のように顔を合わせるのが常である。この関係は、単に近くにいるということだけでなく、それ以上に重要なのは、仕事を媒介とした仲間、あるいは自分の仕事をしていく上で、長期にわたって重要なかわりをもっている人々だということである。第一カテゴリーは、ソトの人々に対するウチの集団として峻別され、密度の高い人間関係を形成している。この第一カテゴリーをとりまいて、第二カテゴリーが設定されている。第二カテゴリーとは、様々な「知り合い」とよばれる人々、あるいは、直接知らなくても何らかの既存のネットワークに支えられているような人々の範囲である。活動のスケールが大きい人ほど第二カテゴリーの機能が高くなる。日本人にとっては、この第二カテゴリーまでが自分と関係をもつ人々で、仕事ならびに社会生活は基本的にはすべて第一、第二カテゴリーの中で営まれる。それ以外は他人（ヨソのヒト）であり、これは第三カテゴリーとよばれる。第一カテゴリーの人間関係は、「われわれはみな同じなのだ」「すべてお互いにわかっている」ということを前提としている。ここに日本人の「つき合い」の基本的パターンが形成されている。そして、第二、第三カテゴリーは、第一カテゴリーの延長線上に位置づけられているから、それぞれの間には断絶がなく連続しているのである。中根はこれを、日本人の異質を認めない連続の思想とよんだ。

岩田（1982）は、内と外という概念は用いていないが、日本人の人間関係は親密さの程度に

よって3つのカテゴリーに分けることができると述べている。第1は「気のおけない関係」とよばれるもので、最も親密な関係である。この関係においては、相互の好意は努力して維持する必要のないほどに確かなものとなり、互いに相手の好意をあてにすることができる。その好意は、言葉や一時の誤解などによっては傷つかないものと想定されている。互いに無理を言っても許され、また、私的に立ち入ったことをうちあけることも許される。相手に対する期待は高く、道義的期待以上のものであるが、この期待を裏切った場合にも、悪意がなければ許される。第2は、互いに名前や地位を知り、個人的な接触によってその人柄を知っているような関係で、「なじみの関係」と名づけられている。この関係においては、ある種の道義的期待が相互の間に形成され、それと共に、この期待を裏切らないであろうという相手に対する一種の信頼感が形成される。そして、多くの場合、この期待はほぼ充たされる。これは、自己の期待の充足以前に、周囲の期待をおもんばかってこれを充たそうとする日本人の行動様式に大きく依存していると考えられる。もし道義的期待を裏切るような行為が行われた場合は、そこに特徴的な道義的責任の意識が生ずる。この道義的責任の意識こそが、日本人の責任意識の中核をなしている、と考えられている。第3は、名前も素性も知らない“縁なき人びと”の間の関係、いわば行きずりの関係であり、「無縁の関係」とよばれるものである。この関係にあっては、一種の無関心によって相対する。この関係を特徴づける基本的なファクターは、相互における道義的期待の欠如、ないしその極度の希薄さである。従って、この関係において人に裏切られることはない。もともと相互に期待をもっておらず、期待を裏切られることもないので、この関係においては、遠慮をすることなく粗野な行動をとることができる、というのである。これらの3つのカテゴリーに示された日本人の人間関係の特徴は、(1) 親疎の関係によって人間関係が激変すること、(2) 親しい間柄における相互のつよい期待の形成とそれを充たそうとする努力、(3) ひとたび親しい関係が形成されると、この関係自体が独自の意味をもちはじめ、自己目的化し逆に人びとを拘束しはじめること、その結果、争いによって破綻しない限り、この関係は永続するものと想定されること、の3点である、とされる。

以上の理論においては、それぞれ視点が異なるために類型化のしかたに若干の相違はあるものの、日本人の人間関係は、一般的に、「内」に親しい身内や仲間の世界、「中間」に遠慮や義理や体面がからむ知人の世界、「外」に無縁の他人の世界、という三層から構成されるものと想定することができる。この三層構造をもとにして、以下の考察を進めることにする。

### Ⅲ. 一般的な他者とSelf-Focus

日本人の場合、self-focusを喚起する一般的な他者とは、「世間」を意味している。特に、井上(1977)の枠組みでいう「ひろい世間」がこれにあてはまると考えることができよう。

「世間」とは、井上(1977)によれば次のようなものである。「世間」とは、個人(つまり行為主体)の側からいえば、日本人に特有な一種の準拠集団である。日本人は日常生活におい

て、「世間」に準拠して、自分の行動を律し、判断していることが多い。つまり、日本人は、「世間」に準拠して恥ずかしくない行動をすることを社会的規範の基本においてきた。人の行動が「世間」という社会的規範の適応規準から逸脱した時、「はじ」という形式の社会的制裁を受けるのである。「世間」に準拠して恥ずかしくない行動をするということは、とりもなおさず「世間」から笑われないような行動をすることであった。従って、「世間のもの笑いにならない」ように、我々はいつも「世間の眼」を気にして、体面・体裁、つまり「世間体」をつくらなければならない。唯一絶対神をもたない日本人の多くは、「世間の眼」から見られた時の自分を恥じるという、きわめて状況的な倫理を個人の内面につちかかってきた。日本では、普遍的な価値規準をもたなかったので、「世間の眼」にとられるという状況の過程の中で、ひとに笑われまいとする防禦的な側面が重視されてきた。このように、ソトなる「世間」の価値規準にコミットすることによってウチなる自分を見つめるというのが、日本人に特有な「準拠集団」の構造の本質である、という。

また、阿部（1995）は、次のように定義する。世間とは個人個人を結び関係の環であり、会則や定款はないが、個人個人を強固な絆で結び付けている。しかし、個人が自分からすすんで世間をつくるわけではない。何となく自分の位置がそこにあるものとして生きている。日本人は一般的にいて、個人として自己の中に自分の行動についての絶対的な基準や尺度をもっているわけではなく、他の人間との関係の中に基準をおいている。それが世間である。日本人は長い間世間を基準とし、行動の指針として生きてきた。世間には厳しい掟があり、それを守っている限り、世間の中で何らかの位置は保てる。日本人は世間という枠組みの中で、常に世間の眼を気にして生きている。世間から相手にされなくなることを恐れており、世間から排除されないように常に言動に気をつけているのである。いわば世間は日本人の生活の枠組みとなっている。

木村（1972）は、われわれの存在の根拠が「空間的」に表現されたものが「世の中」であり、「世間」である、と述べている。私たちは、自分の存在を超個人的な「人と人との間」に負っている。これが普通の日常的な意識にとらえられたものが、世の中であり世間である、というのである。

このように我々の行動を規制する「世間の眼」は、人が成長するにつれて、それまでの長い年月における多様な他者との接触、特に重要な他者たちとの接触の経験の蓄積によって、自らのうちに内面化して持つようになる（梶田，1988）ものである。

従って、世間が自分をどのように見るかを意識すると、公的self-focusが高められ、世間から笑われないように、排除されないようにという基準がsalientになる。その結果として、様々なマナー、ルール、礼儀作法、エチケット、常識に従って、状況に適合した行動をとるよう動機づけられることになる。



#### Ⅳ. 特定の具体的な他者とSelf-Focus

特定の具体的な他者によって喚起されるself-focusについて考える場合、その他者が「誰」であるかが重要なポイントになる。そして、日本人においては、それは結局、その他者が内に属するか外に属するかという問題につながることになる。それによって、その他者が自分にとってどのような意味をもつのか、その他者からの評価がどの程度重要であるのかが決まり、喚起されるself-focusの質が規定されることになる。

尚、ここで取り上げる人間関係の内と外の区別は、心理的な自己関係が問題とされるので、前述のうち土居（1971）および井上（1977）の枠組みを採用する。その内と外の概念と、他者の重要さの程度との関連から、考察を行うことにする。

まず第1に、一番内側に属する他者は、「身内」・「仲間内」・「内輪」であり、「重要な他者」であることが多い。このような他者によって喚起されるself-focusでは、自己の外側よりむしろ内面への意識の方が優勢であると思われる。すなわち、感情や動機づけが明瞭になったり強化されたりすることが推測される。このような「内の他者」に対しては、内づらを見せ、親しみをこめた普段着の態度で接することになる。そこでは、「外の他者」には見せないような率直な言動や本音も表出される。むしろ、「内の他者」に対して「外の他者」に対してとるような言動を示すと、「よそよそしい」とか「他人行儀」と非難される（船津，1982）ことにもなるのである。ただし、「内の他者」であっても、その他者と接する場の状況次第では、その他者のもつ意味が変わってくることもある。例えば、家庭では親子、きょうだい、夫婦といった関係であるが、職場では上司と部下、同僚といった関係になるというような場合は、家庭内と職場とでは相手のもつ意味が異なり、それぞれの場にふさわしい態度や行動をとることになる。あるいは、家族という「内の他者」であっても、儀式の時などには、「外の他者」に対するのと同じようにあらたまった態度で接することもある。これらの場合は、自己の外側への意識が優勢になると考えられる。従って、「内の他者」によって喚起されるself-focusは、場の状況の公私によって、注意が向けられる自己の側面が異なり、salientになる基準も異なるので、それに応じて行動も影響を受けることになる。

第2に、中間帯に属する他者は、「義理の関係」や「知人」（土居，1971）、「せまい世間」（井上，1977）のことである。ここに属する他者は、内にも外にもなりうる微妙な位置にいる（土居，1971）わけであるが、これらの他者と接するのはおおむね公的場面であると考えてよい。それだけに、我々が公的自己を最も強く意識するのはこれらの他者に対してであろうと思われる。ただし、他者のもつ意味や重要さの程度、場の状況には様々な段階があると考えられる。例えば、職場で上司や取引先の人と仕事の交渉をする、入学や就職のための面接試験で試験官と相対する、など、自己が評価の対象になる、あるいは評価懸念を生起させるような「重要な他者」と公的な場面で接するような場合は、公的self-focusが最も強く喚起されるであろう。一方、近所の人と井戸端会議をする、学校で同級生と接する、といったような場合は、公と私

の中間にあたるような公的世界が作り出されることから、先の場合よりは公的self-focusの程度が弱まる事が推測される。従って、その他者からの評価が重要であると認知される場合ほど、公的self-focusは高められ、またその質も複雑であろうと思われる。このように、程度や質に差はあるものの、「中間帯の他者」に対しては公的self-focusが高められる。その結果として、他者からの評価や印象を気にして、他者から受容されるようにあるいは拒否されないように言動をコントロールし、印象を操作しようとするため、よそ行きの態度や行動をとり、外づらで接することになるのである。

第3に、一番外側に属する他者は、いわば「よそ者」や無関係の「赤の他人」であって、自己にとって重要な存在ではない。そのため、この「外の他者」にどのように見られようとあまり気にならない。例えば、街中や駅の階段などで滑ってころんだ時、電車にあと一歩で乗り遅れた時など、まわりの人達の視線を浴びて公的self-focusが高まり、恥ずかしい思いをする、というようなことはある。しかし、相手が単なる行きずりの人である場合は、「旅の恥はかき捨て」ですむところが大きいので、self-focusの高まりは一時的なものであって、影響が後に残ることは少ないと思われる。つまり、「外の他者」に対しては、self-focusは「内の他者」や「中間帯の他者」の場合ほど強くは喚起されないことになる。そこで、「外の他者」に対しては一般に無視または無遠慮の態度がとられ（土居, 1971）、無関心で愛想がなく、時には冷淡で排他的にすらなる（狩野, 1985）のであろう。

以上のように、特定の具体的な他者によって喚起されるself-focusは、その他者が誰であるのか、その他者とどういう場でどういう関係で接するのか、そしてその他者が自分にとってどのような意味をもつのか、その他者からの評価がどの程度重要であるのか、によって、その質や程度が異なるといえる。

ところで、井上（1982）の指摘によると、我々が特定の具体的な他者と接する時、二者関係の場面状況は、二者の関係だけで完結された構造の世界では決してなく、「世間」あるいは「世間の人」という第三者の存在を前提としているのが常態である、という。つまり、眼前にいる特定の具体的な他者との相互作用を、「世間」あるいは「世間の人」という第三者が観客として見ているという三者関係のモデルが基本構造であるとするのである。ここで井上（1982）がいう「世間」とは、「ひろい世間」のことであると推察できる。従って、特定の具体的な他者の存在により喚起されるself-focusに関して、次のような補足が必要となる。我々は、直接接する特定の具体的な他者からどう見られるかということと同時に、その場には存在せず直接には接触しない第三者である「ひろい世間」の眼からどのように見られるかということをも意識させられることになる。いわば二重のself-focusが起こる。その結果、眼前にいる特定の具体的な他者と、その背後にあるひろい世間の両方に対して恥ずかしくない行動をとろうとすることになる。そしてこのプロセスは、公的場面において顕著であろうと思われる。

## V. おわりに

我々の日常生活は、様々な他者との相互作用の中で営まれている。一般に日本人は、他者の眼を気にし、他者からの評価に対して敏感であるといわれており、他者の存在がきわめて大きな位置を占めている。それだけに、日本人のself-focusを論じる際には、日本文化の枠組みにおける自己と他者の関係性という視点から考察することが重要であると思われる。北山(1995)が指摘するように、心理的プロセスは文化に依存していると考えるのが妥当であり、欧米理論の後を追いかけて、モデルとする姿勢は見直す必要がある。

本稿で考察した仮説をさらに詳細に検討し、どのような関係の他者により、自己のどのような側面に注意が向き、それがどのような行動に結びついていくのか、という一連のプロセスを実証的に明らかにすることが今後の課題である。

### 引用文献

- 阿部謹也 1995 「世間」とは何か 講談社
- 荒木博之 1973 日本人の行動様式——他律と集団の論理—— 講談社
- Buss, A. H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco : Freeman.
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- Duval, S., & Wicklund, R. A. 1972 *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness : Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- 船津衛 1982 自己表現の作法——日常場面における公と私—— 日本社会心理学会編 公と私の社会心理学(年報社会心理学第23号) 勁草書房 Pp. 63-84.
- 濱口恵俊 1977 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社
- 井上忠司 1977 「世間体」の構造——社会心理史への試み—— 日本放送出版協会
- 井上忠司 1982 まなざしの人間関係——視線の作法—— 講談社
- 岩田龍子 1982 日本人とアメリカ人の人間関係 濱口恵俊編 現代のエスプリ 第178号 日本人の間柄 至文堂 Pp. 38-52.
- 梶田毅一 1988 自己意識の心理学[第2版] 東京大学出版会
- 狩野素朗 1985 個と集団の社会心理学 ナカニシヤ出版
- 木村敏 1972 人と人との間——精神病理学的日本論—— 弘文堂
- 北山忍 1995 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 南博 1983 日本的自我 岩波書店
- 中根千枝 1972 適応の条件——日本の連続の思考—— 講談社
- Scheier, M. F., & Carver, C. S. 1983 Two sides of the self : One for you and one for me. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol. 2.

- Hillsdale, N. J. : Lawrence Erlbaum Associates.
- Schlenker, B. R., & Weigold, M. F. 1990 Self-consciousness and self-presentation : Being autonomous versus appearing autonomous. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 820-828.
- 高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社
- 鐘幹一郎 1994 日本の自我のアモルファス構造と対人関係 広島大学教育学部紀要第一部(心理学), **43**, 175-181.
- 辻平八郎 1989 他者の内面への関心, 外面への関心, および空想的関心——他者意識概念の明確化とその測定—— 甲南女子大学人間科学年報, **14**, 31-48.
- 辻平八郎 1990 自己意識における視点 甲南女子大学人間科学年報, **15**, 27-44.

## Self-Focus and "Others"

— On the Basis of Interpersonal Relations in Japanese Culture —

Etsuko UEDA

When we discuss self-focus, the presence of "others" is regarded as its meaningful part. However, the previous researches have dealt with only generalized others, and furthermore have discussed self-focus on the basis of interpersonal relations in American culture. The purpose of this paper is to discuss self-focus caused by "others" both from the point of view of interpersonal relations in Japanese culture and by distinguishing between generalized others and specific and concrete others.

Interpersonal relations in Japanese culture consist of three categories. They are family or friendly fellows in the inside group, acquaintances in the middle group, and complete strangers in the outside group.

First, generalized others mean "*seken*" to the Japanese. "*Seken*" will heighten public self-focus, and a person will try to behave so as not to be ridiculed and condemned by "*seken*". As a result, a person will tend to adapt his behavior to the situations according to various manners, rules, and common sense.

Second, self-focus caused by specific and concrete others is divided into three categories.

Self-focus evoked by others in the inside group varies with private situations and public situations. It may be presumed that others in the inside group in private situations make a person focus his attention on the private self, but that others in the inside group in public situations make a person focus his attention on the public self.

Others in the middle group will heighten public self-focus, and it will lead a person's behavior to self-presentational principles.

Others in the outside group don't seem to evoke self-focus.

Implications are discussed for double self-focus by specific others and "*seken*".